

# 学生災害ボランティアリーダー養成講座の開催

事業代表者（教育学部・教授・長谷川万由美）

## 1. 事業の目的・意義

栃木県は平成27年9月の関東・東北豪雨災害(以下、単に豪雨災害とする)で大きな被害にあった。学生に被災の状況や当時の学生の活動の様子を継承していくことは、被災地にある大学の責務と考え、災害時に活躍できる支援力を学生に身につけさせることにより、災害に対応できる地域づくりを推進することを目的とした「学生災害ボランティアリーダー養成講座」の開催を企画した。協働の相手は豪雨災害時に本学から学生ボランティアが多く参加した鹿沼市社会福祉協議会(以下、鹿社協とする)である。

平成28年度は一泊二日の合宿形式で学生災害ボランティアリーダー養成の研修を行い、その中で豪雨災害時の状況について学んだり、災害時にボランティアとして活動するための知識を避難所運営ゲームなどを通じて学んだ。今年度は①実践的に避難所運営のあり方を学ぶ、②ワークショップを通じて参加者同士が学びあいができる、③災害ボランティアセンターの立ち上げを模擬的に体験できるの三点を目的として、学ぶ機会を複数回に分けて設けることとした。本事業で期待できる効果として、①豪雨災害時の災害ボランティア活動への学生の参加に関する振り返り、②豪雨災害時の被災者と交流することを通して、被災者の心のケアになる、③来るべき災害時に備え、学生の中でのコミュニティ支援力が高まるなどがあげられる。

## 2. 事業内容

### ①実践的に避難所運営のあり方を学ぶ

図上訓練として、実際に近い形式で避難所運営のあり方を学ぶ方法にはいくつかあるが、今回は、豪雨災害を受けて HUG の水害バージョンに取り組むことにした。HUG は正式名所を避難所運営ゲー

ムと言い Hinanjyo Unei Game から通称 HUG とされている。静岡県地震防災センターで開発された盤上訓練の一種で、避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験できる。通常の HUG は地震が発生したことを想定した内容となっているが、今回は豪雨により避難が必要となった場合を想定して作られた水害版 HUG を用い、学生8名(男性3人、女性5人)が2グループに分かれて行った。尚、この学生らは昨年度のリーダー養成研修にも参加しており通常版の HUG を全員が体験していた。

参加した学生からは「地震と違う水害での対応が学べた」という感想もあった一方で「イベントカードに書かれている避難者からの報告をどのように生かしていいかわからない」「対応が適切だったかわからない」などの感想もあった。子どものころから地震に対する避難訓練を行ったり、東日本大震災の経験から地震についての知識は比較的持っていたりするのに対して豪雨時の対応についての知識が不足していることが考えられるので、水害版 HUG を行うにあたってはより丁寧な振り返りの時間を設け、経験者や支援者からのアドバイスを受けられるようにすることが大事だと思われる。

### ②ワークショップを通じて参加者同士が学びあいができる

次にワークショップを通じての参加者同士の学びあいとして「とちぎぼうさいキャンパス～楽しく防災を学ぼう in 宇都宮～」(栃木県県民生活部危機管理課主催)の開催に協力した。第1部の講演では「そろそろ新しい防災の話をしよう」と題し

て、一般社団法人防災ガール事務局長の中西須瑞化さんとメンバーの大森由樹さんが講師を務められた。中西さんからは若者ならではの発想で防災に取り組むために防災ガールを設立した経緯や現在の活動に内容についてお話しがあった。また都内大学四年生の大森さんには東日本大震災の被災者として当時から今にいたる思いや学生にもできる災害への備えをわかりやすくお話しいただいた。

第2部ではグループに分かれて、NPO 法人栃木県防災士会理事長の稲葉茂さんを講師に県防災士会会

員の協力を得てHUGを実施した。約40人の学生が参加し、前半を踏まえてグループ内また全体での学び合いが実現した。



図1 ボランティア受付

③災害ボランティアセンターの立ち上げを模擬的に体験できる

平成27年9月の豪雨災害では、本学学生が鹿社協が設置した災害ボランティアセンターに参加したことから平成28年11月には災害時のボランティアに関する内容を含む協定を本学と鹿社協で結んでいる。この協定の下、鹿社協の防災関連事業への学生の参加、鹿社協職員の本学授業での講話などを続けている。

今年度は当事業の一環として、鹿社協が実施する災害ボランティアセンター立ち上げ訓練に学生が参加することとした。参加した学生は教育学部

5名、国際学部1名の6名である。実施は東日本大震災発災日に合わせて3月11日であった。災害ボランティアセンター設置時のマニュアルに沿って、ボランティア受付、活動紹介、送り出し、資材貸し出し、報告などの部署が設けられた。学生はボランティア役として、受付を済ませた後、資材貸し出しを経て、ボランティアセンターから送り出される役割を担った。実際には、ボランティア活動を行うのではなく、伺った先では被災者に当時のお話しをお聞きし、ボランティアセンターに戻って活動報告を行った。



図2 資材の貸し出し

学生からは「授業で学んでいたことを実際に体験して理解が深まった」「被災地域で当時の様子を聞くことができ勉強になった」などの感想が寄せられ、現場に参加したことで大きな学びがあったことがわかった。また鹿社協からは学生が参加することで若い世代の視点から立ち上げ訓練を振り返ることができ有意義だったとのご意見を頂くことができた。

#### 4. 事業の成果及び今後の展望

今年度は様々な機会を捉えて目標に沿った事業を展開し、災害時の学生ボランティアの活動の振り返り、被災者との交流を通じた心のケア、学生のコミュニティ支援力の向上といった当初の目的について一定の成果があった。また被災地での活

動を考える上で、宮城県亘理町での学生の活動にも取り組んだ。栃木県や鹿社協といった地域の他機関と連携することにより、今年度も実践的で有意義な学びを学生が行うことができた。今後も、相互に協力して地域の防災力・減災力を高めていきたいと考えている。